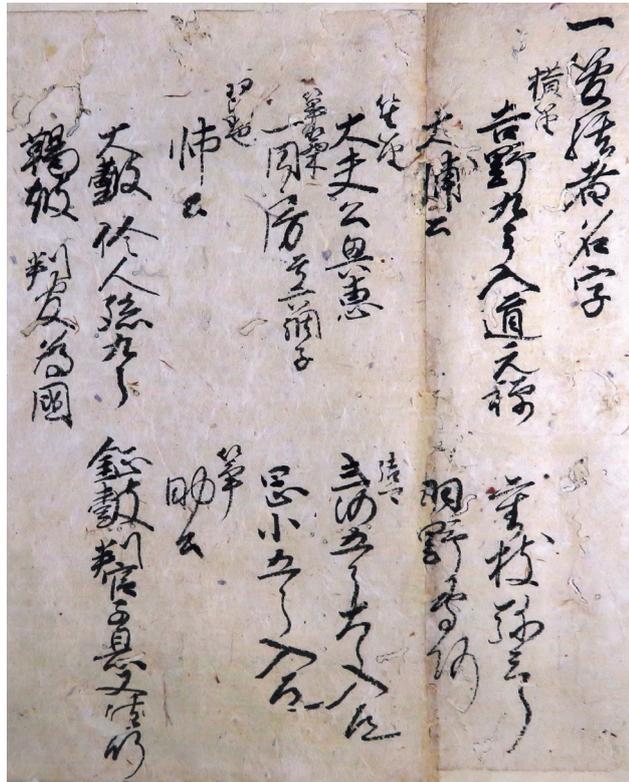


- 一管絃者名字
- 横笛 吉野九郎入道元禅 重枝弥三郎
 - 大輔公 羽野専阿
 - 笙笛 大夫公興恵 三河五郎太郎入道
 - 御郷
 - 筆築 一円房号六調子 岡五郎入道
 - 箏 助公
 - 琵琶 帥公 鈺鼓 判官子息又法師
 - 太鼓 伶人孫九郎
 - 鞆鼓 判官為国



文書館

レキシノオト

「音」で読み解く
防長の歴史

♪ 26

「仁平寺本堂供養日記」（興隆寺文書11）

芸能ノオト①

寺社の音あれこれ

【法会・祭礼】

お寺やお宮の主要な行事である法会や祭礼の場では、どんな音がしたでしょうか？

観応3年（正平7、1352）3月周防国吉敷郡菅内（現、山口市）にあった仁平寺の本堂が完成し、供養の法会が営まれました。仁平寺は、仁平年間（1151～54）に創建されたという言い伝えのある天台宗の寺院で、大内氏にも篤く信仰されていました。

その法会の記録（仁平寺本堂供養日記）には、その時に演じられた舞楽（舞を伴う雅楽）の様子が記されています。

3/14 試楽（予行演習。次第は本番当日と同じ）が行われました。

3/15 巳刻（午前10時ごろ）から供養が始まり、「採桑老」（雅楽の舞の一つ）が演じられます。ついで、「導師」の進行のもと、「読師」が経を唱え、「講師」が、法会の趣旨を表明する「願文」や「表白」を読み上げています。

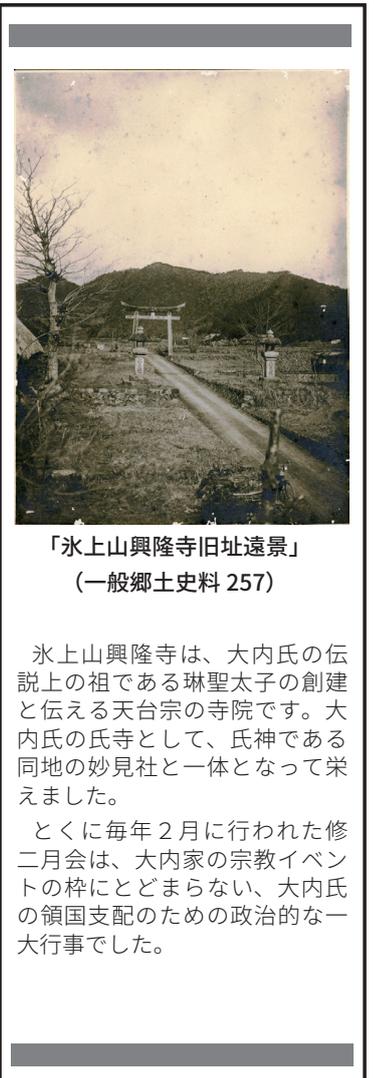
3/16 「舞楽」（舞を伴う雅楽）が行われました。基本は、仁平寺の子院から出

仕した稚児によって演じられる「童舞」です。

まず、「法用舞」は、計8人の童によって「塩夫」、「万歳楽」、「長保楽」、「甘洲」、「林歌」の順で5番演じられました（舞手は1演目2～6人）。その後の、「入調」（にゅうじょう：雅楽のなかの唐楽の曲名。後奏曲の一種）では、「安摩」「仁舞」から「納曾利」までの9番が、伶人（れいじん：雅楽を奏する役人）も加わって演じられます。途中、日が暮れて松明が点されました。さらに、大法会の後の遊宴余興である「延年」が、童と寺僧によって14番まで大々的に演じられました。

なお、音を奏でる管絃者は、「横笛」（龍笛）4人・「笙笛」2人・「筆築（ひちりき）」2人、「琵琶」1人・「箏」1人、「大鼓」1人・「鈺鼓」1人・「鞆鼓（かっこ）」1人の計8種類の楽器と13人の奏者から成り立っていました。いわゆる「三管三鼓両絃」の編成です。

また、大内氏の氏寺である氷上山興隆寺では、毎年2月に修二月会（しゅにがつえ）が行われました。修二月会とは、奈良東大寺のお水取りに代表される、中世寺



「氷上山興隆寺旧址遠景」（一般郷土史料 257）

氷上山興隆寺は、大内氏の伝説上の祖である琳聖太子の創建と伝える天台宗の寺院です。大内氏の氏寺として、氏神である同地の妙見社と一体となって栄えました。

とくに毎年2月に行われた修二月会は、大内家の宗教イベントの枠にとどまらない、大内氏の領国支配のための政治的な一大行事でした。

院で広く行われた年始と豊作予祝のための法会です。

興隆寺の修二月会には、さまざまな儀式がありましたが見物人にとってのハイライトは最終日の2/13に行われる「舞童」と「歩射」でした。

「舞童」とは、仁平寺本堂供養日記に見える「童舞」と同じく、管絃が奏でられるなか、華麗な衣装を着た稚児によって演じられる舞楽です。また、「歩射」（奉射）は、中世の神社の祭礼で広く行われた行事で、神事祈祷のために神前で大的を射るものです。

想像力をはたらかせれば、管絃の音、勇壮な武者によって射られた矢が的に当たった時の音、見物人の歓声等々が聞こえてくるようです。

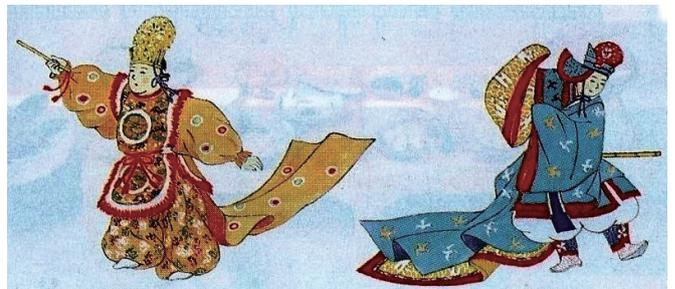
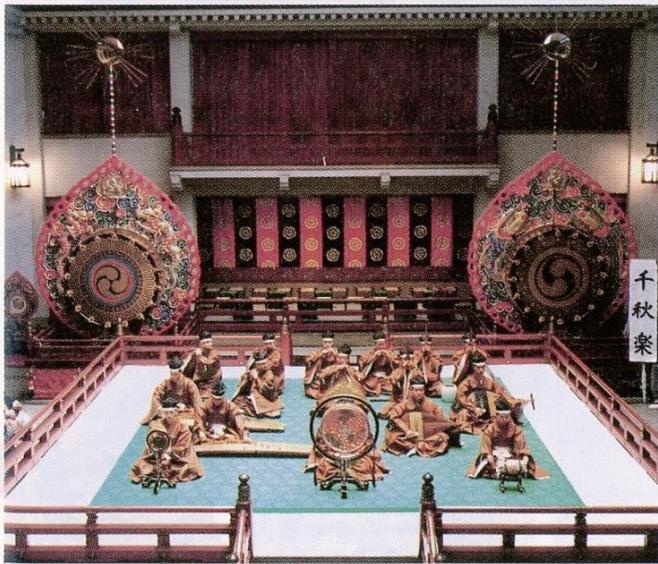
【祈祷】

1440～50年代に、興隆寺が大内氏のために祈祷をした事例が複数確かめられます。

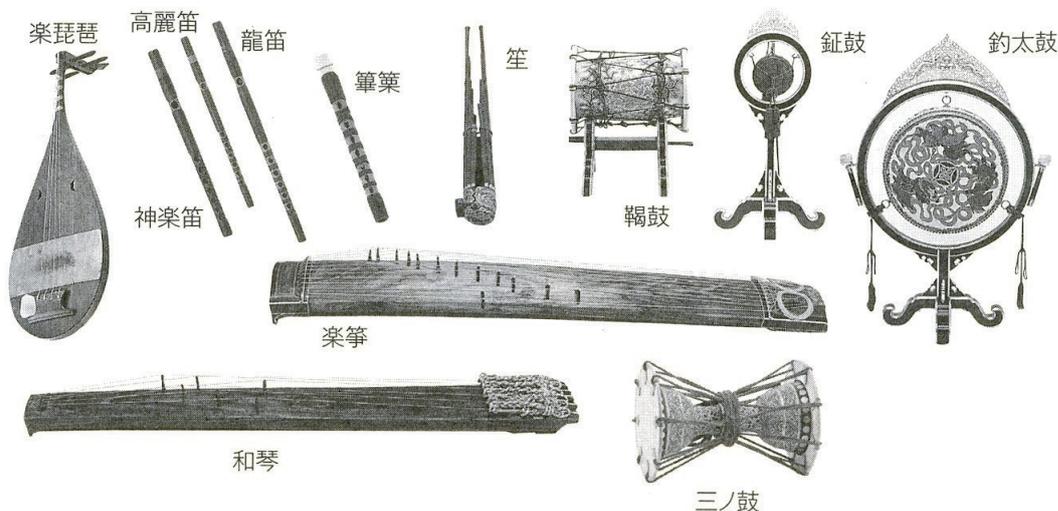
たとえば、興隆寺が九州出陣中の大内軍の勝利を祈り、その証として巻数（かんじゅ：僧が願主の依頼に応じて読誦した経文などの題名や回数を記した文書）を捧げたことがあります。陣中でそれを受取った大内教弘は、礼状のなかで「おかげで、今日あたり敵陣が落ちるだろう」と感謝の言葉を伝えています。

また、大内氏が雨乞いのための祈祷を興隆寺に依頼したところ、効き目があって国中が喜んだこともありました。

具体的にどんな経典が読まれたかはわかりませんが、大内家のために祈りがさげられ、読誦の声などが響いたことでしょう。



左：千秋楽
上左：陵王、上右：青海波
(いずれも、東京書籍『新詳説国語便覧』より転載。)



雅楽器の種類（田中健次『図解 日本音楽史』より転載）